



「さらに進む地球温暖化」

住 明正 著

ウェッジ, 2007年6月

177頁, 1400円 (本体価格)

ISBN978-4-86310-001-5

2007年8月, 日本列島はかつてない暑さに見舞われ, 各地で最高気温が40°Cを越し, 多治見 (岐阜県) と熊谷 (埼玉県) では40.9°Cとこれまでの40.8°C (山形) の記録を更新した。また, ヨーロッパの一部でも猛暑に襲われた。これら最近の事実を離れても, 近年, 我々が体験する気候がかつてに比べて暖かくなっているというのが実感ではないだろうか。

本書はIPCC (気候変動に関する政府間パネル) の第4次レポートをベースに, 地球温暖化の事実や今後の見通し, 新たな課題などを記述した上で, それでは我々は今後どのように対処すべきかを語りかけている。B6判約180ページのこの本は6章からなり, IPCCとは, さらに進む温暖化を示唆する事実, 気候モデルの発展, 地球温暖化予測, 二一世紀の気候はどうなるか? 地球温暖化の意味するところのもの, と順次展開されている。

IPCCは1988年の創立以来, 今や時事用語の1つとなっているが, そこで合意された英文のレポートは大部にわたり, 読破するのは至難の業である。本書は, その帯紙に「2時間で知る温暖化の真実!」と広告があるように, 地球温暖化問題にかかわる現状と論点についての勘どころを, コンパクトに, かつ平易な言葉で記述している。さらに, 温暖化に伴う土壌中のバクテリアの活発化による大気二酸化炭素増加などの「炭

素循環」のほか, 「海洋の酸性化」など新たな課題についても言及している。

こうした純粋に科学的な記述以外に, 国際舞台での日本の発言権の確保, 新たな気候モデルの構築およびそれに不可欠なスパコンの導入などの苦労にも触れている。また, 温暖化情報の社会への流布は, これまでのように単に情報を生産しておくだけでは不十分であり, 現在の多様なライフスタイルと媒体を踏まえて, あらゆるチャンネルを積極的に利用する必要があるとも述べている。これらは, 著者が今日まで種々の国際的な研究集会と接点を持ち, 日本で地球温暖化予測モデルの開発などに携わり, さらにIPCCのレポート作りのプロセスに実際に参画するなかで得られた種々の体験や想いに基づいている。

著者は, 世界の認識は「暖かい気候がくるのは避けがたい状況であり, どのみち社会が激変するので対応のコストは必要となる。そうしたら, 今から適切な対応をとったほうが安いのか, 問題が発生したときに対応したほうが安いのだろうか?」という点に移っていると述べている。また, 「事態が解明されるまで行動を差し控えるべきだ」との温暖化に対する懐疑的な態度は, 現状を維持し, 傍観しようとするものだとも述べている。現在, 「東京大学サステナビリティ学連携研究機構地球持続戦略研究イニシアティブ統括ディレクター」の掌にある著者は, すでにこうした認識の下に, 自ら実践に足を踏み入れているように見える。

いずれにしても, 国際および国内政治はもちろん, 我々市民レベルでも, もはや避けて通ることの出来ない地球温暖化問題について, 本書は最新の科学的知見と共に, 今後の方向を示唆している好書であろう。

(気象コンパス 古川武彦)